

応用言語学特講
Speaking Task (1回目)

担当: N.O

1.タスク概要

指定された質問に該当する人を見つけるインタビュータスク。例えば、「Find someone who ate an apple in this morning.」など。疑問文に変換し、生徒同士で質問、応答を繰り返してもらう。本来は、クラス（恐らく、20~40人の）全員で行うものと想定されていたのだろう、1人につき1度しか質問は出来ない。しかし、本講義では4人の参加者ということで、同じ人に続けて質問は出来ないものの、何回でも質問可と設定した。加え、解答者はYes/Noのひとことのみで答えられてしまうタスクだったため、もう一文追加して答えるように指示することとした。例えば、上記で挙げた例に答えるならば、「(Q: Did you ate an apple in this morning?) No I didn't. But I ate an orange in this morning.」といったように、質問に関連した情報を付加して答える。

2.授業内実施内容 (案)

初めに、ルールの説明。その時、質問の仕方や答え方の例もデモンストレーションしながら説明をした。

インタラクション終了後は、何項目埋められたか聞いたり、生徒通しでわかったことをタスクで得た情報を使って説明してもらった。

3.このタスクを通して見えてきたところ

○良かった点

- ・ 解答者が、一文を加えて答えるようにしたところは頑張って言葉を紡いでいた生徒の様子が見受けられたので良かった。
- ・ 英語教育とは論点が若干ズレるが先生にとっても生徒にとっても、このタスクはアイスブレイカーになる。1学期または前期の初めの方に行えば、クラスの間を築く礎にもなるかもしれない。

○デメリット

- ・ 少人数での実施だったため、同じ人に続けて聞いてはいけないルールが逆に仇となってしまった。次質問したい人を待っているときくらいはこのルールの例外として許可してもいいかもしれない。
- ・ 問題数が多かった。

時間の見積もりが甘かった。10分もあればすべて埋められるかなと見込んでいたが、意外にその半分くらいしかなかった。

4.今後の発展

生徒の英語熟達度に応じて、タスクでやってもらうことの数を増減変化させると良いだろう。1つは、今回行ったように Yes/No の他に応答に 1 文余計に増やしたりすること。他にも、例えば生徒が一生懸命質問の内容に該当する人を見つけようとさせるよう、何かしらの工夫をすることも手だろう。特に、中高生は恥ずかしがったり、変にいきがったりして真面目にタスクに取り組んでもらえないかもしれないためである。また、先にも挙げたように参加者人数に応じて問題数を減らしたり、もっと適切な時間設定をできると良いと思う。更に言えば、このタスクは他の 3 人の紹介したタスクよりも難易度が低いように感じる。1 文解答の際に増やして答えさせることもさることながら、質問をする際にも、ただプリントに記載された文を機械的に疑問文にするだけではいささか簡単すぎる、機械的過ぎやしないだろうか。問題を工夫したりしてもっと頭を使って発話してもらい、スピーキングの力を活性化させられるようにできると良いと思う。